

無妙法蓮華經——』と云ふ勇氣も樂觀的信念も生じ來り苦海に没在せる衆生を憐愍する情勃々として起るあり。此處に於てか聖祖の奮闘史に私淑しつゝある吾人は言論と實任てふ感念に住し未づ自己修養の範を示し、而して後化他に及ぶべし。世間に云ふ實踐躬行出世間の色心二法の修行、此の域に達して初めて人天の大導師たる資格をも得らるべきなり。然り吾人佛子よ、勉め勵めよ、化他よりも身行を先に。

法華經行者の折伏と迫害

中二 鈴木順曉

諸經中王最爲第一の法華經弘通の爲には、あらゆる迫害を被るべきことは佛識として、教主釋尊法華經說法の會座に於て明かあり。乃ち方便品の『此の經を讀誦し受持する者を見て經賤憎嫉して結恨を懷かむ』法師品の『此の經は如來の現在すら猶怨嫉多し況んや滅度の後をや』殊に勸持品不

輕品の如きは全文字殆んど法華行者に對する迫害の覺悟を垂示せるものに非るはをし、其の世運の衰頹、末法比丘の心、邪智、諂曲なるを述べ、末法の行者たる者三類の強敵に反抗し、不惜身命の決心を以て、惡口罵詈言刀杖瓦石等諸の苦難を忍ばざるべからざるを説くの文意尤も激越を極む。

宜かる哉、此の如來誠言の實現せられたるは今を去る六百有年前、消長明滅の世に出現して天下高僧碩學の淵藪とも云ふ可き、鎌倉に法陳を張り熾んに法華折伏破權門理を獅子吼せられたる、宗祖の御一代、四個の格言を擧げ諸宗無得道を絶叫す、諸宗の僧俗は怨嗟措く處を知らず、法を路傍に説けば杖木瓦礫を投ずるあり、經を壇上に講ずれば狂と呼び、痴と嘲けるあり、公難私難四個の大難無量の小難は其の身邊に集來せり、然れ共上人は益々而強毒之の法鼓を打鳴らし、折伏の決心愈々固く、逆化の氣焰を昂むるのみありき。兩來本宗行者の妙法教化宣傳の爲、謗法の上に大法雨を雨らし反對者の讒作怨嫉は競ひ起るも不屈不撓

教に殉せし者少なからず、彼の熱原神四郎冠者日親の如き、以て其の迫害の大あるを知るべし。

是の如く法華經の行者に諸難の襲來せる、之種々の原因あきにしもあらざれ共、其の主たるは本宗立宗の主旨のたのづから然らしむるにあり、本宗は立教の根基固と折伏にあり、折伏とは已を立てんが爲に他を破する謂なり、實に法華折伏は聖教の大義、釋尊弘法の規範なり、法華經の行者一日も此事あかるべからず、而して本宗は佛一代の聖經中、法華經を以て釋尊出世の本懷、最在其上唯一究竟の眞理とし、他の經を擧げて此經を説明せんが爲の方便ありとし、従つて是等の經を所依とせるあらゆる諸宗は權教にして佛の眞意にあらずと論ず、彼の開宗以來三十年間宗祖により大呼せられ、爾後弘教者の標榜として唱叫し、權門諸宗を擡破せる四個の格言、決して一時弘教の方便に非ず、實に本宗の生命にして行者の維持すべき大主義なり、涅槃經に『若し善比丘たりとも法を壞る者を見て擱て呵責し舉處し驅遣せずんば是れ

佛法の中の怨なり。若し能く驅遣し舉處し呵責せば是れ我が弟子聲聞なり。』と説給へり。

折伏は攻撃に非ずして叱責なり、親の子を叱るが如く、基く處誤を正し妙道に導かんとせる釋尊の大慈大悲に外ならず、我等本化門下たる者『身輕法重死身弘法』の決定心を以て『善に付け惡に付け法華經を捨つるは地獄の業あるべし。大願を立てん、日本國の位をゆづらむ、法華經を捨て、觀經等について後生を期せよ、父母の頸を刎ねん念佛申さずば、なんどの種々の大難出來すとも智者に我義やぶられずば用ひじとなり、其外の大難は風の前の塵なるべし、我日本の柱とあらむ、我日本の眼目とならん、我日本の大船とならむ等とちかいし願やぶるべからず。』の御文を覺悟し、以て大小無量の法難迫害を忍び、不撓の勇、不動の自信を遺憾なく發揮せざるべからず。

死せる萬人を有せんよりは生ける一人あるに如かず、況んや七千の僧侶三百萬の信徒一度昏睡より起ち、異体同心の大節を復し、一擧捨身、折伏

弘法の聲を齊うせば、宗祖の大理想たる『一天四海皆歸妙法實現の概あくんばあらず、豈覺醒せざるべけんや。

衷心のさゝやき

中五 猪口海靜

人は己の微弱と不幸とを知れる時偉大あり、とは泰西のある學者の言葉であるが今の自分には之を真に味ふことが出来得ないのを悲んでゐる、偶々人をして我に求めしめなければならぬのは自分である、我より人に求めてはならぬ、世をして我に求めしめなければならぬのは自分である、我より世に従つてはならない、自分が求めたり従ふたりする時は自分が既に權威を失ふた時である、人をして我に求めしめ世をして我に依らしむる時其處に自分の權威が在りこゝに初めて世を動かすことも人を導くことも出来得やうしかし今の自分は世人の動くまゝに動かされればならないとは實に腑甲

斐なき過ぎる、是れで人を教へやうとか世を導かうとぞ、思ふのは頗る危険なとりきめではあるまいかと、切實に思ふことも時にはあるが、之れが衷心の眞實か偽りか自分乍ら分別が付かぬのである、譬へば人の心を白と黒とに分けて見れば折には白の心を持つこともあるが忽ち黒の心に覆ふはふした文字や言語やに易々馴致され、包藏され、貫通されつゝ、尊い生命に、自ら挺身し躍入してゐながら、自分の所有とすべきことをば、遂に忘るゝは常である、肉を壞り血を迸ばしらせ骨を碎いて、内面の戦闘を経験することなくして、生命のみが向ふから飛んで来て自分の體內に、流れ込むものか、然し縦使流れ込むにしても、遂に之れが自己のものとならずに、行くもの斯の如しの状態で、此の尊い月日を送りつゝあるのではあるまいか。

やれ信仰の論理だ概念だなどゝ、其の取り扱ひ其の弄ぶことの愉快さに肝心の生命をば、胴忘れ